

仙林寺だより

NO. 74
編集・発行
松田正貴

行事報告

河北新報記者取材

八月二十七日、突然の電話に驚きました。「家族の内の誰かが何か・・・？」一瞬不安がよぎりましたが、さにあらず。裕好さんに関する取材との事でした。取材の前にまずは敵を知るべし！早速坐禅体験にお誘いすると「では明朝に！」と流石に記者魂とでも言いましょうか。テレビ取材依頼の時とは臨む姿勢が違うようです。当日(二十八日)五時二十分時間厳守にて、ご挨拶も早々に早速お目当ての裕好さんより指導を受けます。ちようど定例坐禅会の日でもあり、会員の皆様の真剣な姿勢も一緒に味わって頂きました。まずは、取材抜きの手体験との事でしたが、いつの間にか滞在時間も四時間を超え、このまま手ぶらでは帰れない記者さん、三種の神器をおもむるに取り出し一気に取材へと転じます。出家前は仕事上人の上に立つ事が多く、この様な機会も多かった裕好さんですが、今回の記者さんの変わり身の早さには驚きの様子。記事も「出るかどうかわかりません、出るにしても何時になるかわかりません」との記者さん談ながら、取材から二日後、三十日あつという間の掲載となりました。話題はホットなうちが宜しいようです。



観音堂リフォーム

今風に言ってみましたが、事は重大でした。雨が降るごとにドキドキ感が増していた原因は屋根の雨漏りにありました。一時は建替え案も浮上しましたが、長年の風雪に耐え雨漏りを堪えた柱の一本一本に歴史のしわが刻み込まれております。足腰の弱体化はコンクリートや東石の力を借りました。野地板まで痛んだ屋根は、張替えを施し、軽量化をはかる為、銅版葺きとしました。傍目にはまだまだ元気なお姿ですが、昭和八年の建立ですから御年七十四歳、あまり無理をさせずに体力を温存していただく事が肝要です。修復の後、より良い年の重ね方のお手本としてのお役も担って頂きます。まさにアンチエイジング、これからまだまだ未永くお付き合いたい事となります。宜しくお願ひします。

お詫び 工事がお彼岸と重なりお墓参りに支障をきたしてしまいました。早急な修理が望ましいということでこの時期の選定となりました。参拝者の皆様にはご不便をおかけしました事、あらためてお詫び申し上げます。



道山、蘭齋画碑

伊達市の文化財にも指定されている両翁の画碑が観音堂改築に伴い場所を移転致します。現在の場所より五十メートルほど南、山門を入って左側、象岩の西隣へと引越します。観音堂南側に二基、秋葉堂前に一基と離ればなれを余儀なくされていた画碑も、観音様のご利益もあつてか、めでたく揃って日の目を見た感があります。芭蕉の句碑は、本堂前、多羅葉樹の樹下に落ち着きました。多羅葉樹は葉の裏に字を書く黒く浮かび上がるところから、葉書の木の別名もあり、古くは経文を書き記したの云われもあります。何となく短冊を手にした芭蕉の姿が目につかぶような気がしませんか？

ひとこと「時の鐘」

旧暦の遅れという影響もあるのでしようが、残暑が厳しいお彼岸の月です。ところで、現在の暦は太陽を観察して決める太陽暦を使いますが、太陰暦は月をもとに暦を決めることが知られております。お彼岸の入り二十日は旧暦で言えばまだ八月十日、秋の季語でもあるお月様の観察に分がありそうです。さて、「暑い暑い」と言いながら、秋の虫は泣き始め、彼岸花も忘れずに咲き始めます。そんな風情に彩りをといたうわけでもありませんが、四十年代前半の私

と、五十代後半の裕好さんの感覚が合致、
「夕焼け小焼けで日が暮れて山のお寺
の・・・。」と口ずさみながらかどうかは定
かではありませんが、九月より夕方四時に
大梵鐘をつき始めております。鐘司（鐘
を撞く役）不在のときはお休みです。時の
鐘とはいえ、時には当てにならない事もあ
るようで、あしからずご了承を。

慎み

【法句経二百三十四】

その身をつつしむ

そのことばをつつしむ

その意をつつしむ

これらの人こそ

おのれを護る

賢者とはいふ

【解説】藤原正彦さんの「国家の品格」以来、
「女性の品格」「男の品格」などそれぞれ
の品格をうかがう本がベストセラーになつて
おりますが、いま最も話題性のある品格とい
えば「横綱の品格」なのでしょう。余談
になりますが、大相撲の番付けは、横綱大関
関脇小結を称して三役と言います。なぜ四役
とは言わないのか、理由は大関が負け越すと
番付けが下がりますが、横綱の地位は下がる
事がない、横綱は別格という事だそうです。
別格とは格式が特別で扱いが違ふ意味でし
ようから、そこにはその立場としての特別な
品位が求められるのはむしろ当然の事と思ひ
ますが如何でしょうか。ところでこの品位、
品格という文字を辞書で引いてみますと、「人
に自然にそなわる人格的価値」とあります。
相撲の世界で強くなるためには、過去に不惜
身命（ふしやくしんみょう）とその決意
を表した横綱もありましたが、稽古に稽古を

重ね、たゆまぬ精進が大切なのだと思ひます。
千利休の言葉に「稽古とは一より習い
十を知り 十より帰る もとのその一」とあ
ります。稽古とは、技や力だけではなく、古
（いにしえ）を学び、人格的価値を高める意
味があると思ひます。横綱に上り詰めた事で、
十を知ったがごとくご本人もまた周囲の目も
そのように感じたのでしようが、実はちよつ
とつまずいて立ち止まったところに本當の意
味で十にたどり着くきつかけを与えられたの
かもしれません。これからの人生を頂上から
の帰り道と見れば、もとのその一を謙虚に眺
め、慎みの歩みを進める事がご自分の心を護
る道行きとなるものと思ひます。不惜身
命・本来の意味は、仏法の為に命を惜しまず
精進する事を言う。

賢きひと

【法句経八十三】

心ある人は
いかなるところにも

著するなし

かかる人はこの欲

かの欲にほだされず

幸福にあつても

はた 苦しみにあつても

心ある人は

その思いつかぶことなく

その思い沈むことなし

【解説】お彼岸七日目、最終日は智慧修行
の日とされています。布施・持戒・忍辱・精
進・禅定と悟りの完成に向かつて進んだ総仕
上げの日であります。布施は、惜しむ心を
退け他者に施す行い、持戒は、行いを正しく
し、忍辱は怒りやすい心を治める。精進は、
怠りの心をなくし、禅定は、散乱する心を静
める。そして智慧とは、私達の欲得を交え

た世間で言う知恵のことではなく、御仏より
示された以上五つの徳目をはたらきとして生
かして行く事、悟りの智慧を言うものです。
ところで、この「悟り」についてのお話に
この様にあります。ある日の事、お釈迦さ
まのところ一人の男がやってきて「お悟り
とは何か」と質問します。一通りの説明をす
ると「では、それを知る事であなたの弟子は
みんな悟る事ができるのか」と突っ込んでき
ます。当然「悟る者もあれば悟らぬ者もある」
とお答えになりますが、男は半ば投げやり
に「結局は、本人の能力次第だと言いたいのだ
ろう」とふてくされていると、お釈迦さまは
逆に男に問いかけます。「あなたはお城に行く
道を知っていますか、勿論知っているとばか
りに、得意げに道順を教えます。するとお釈
迦さまは「その道順を知れば間違ひなくお城
にたどり着けるだろうか」とお尋ねになりま
す。「教えた通りに注意深く、間違ひなく
歩けばお城に着けるはずだ」と言う男に「悟
りの道と同じだね」と仰つたのです。途中で
休んだり、また歩くのをやめれば、着くのが
遅くなつたり、着けずじまいで終わつてしま
います。「仏の教えによつて、悟りの道は
確かに示されている。ただ、歩むのは私達自
身、途中で道に迷ふ事があつても、求める心
さえ失わなければ悟りの城に誰もがたどり着
く事ができる」との教えを言つたものでしよ
う。「欲」とは欲求というように人間が本
能として求めるものなのでしょうが、それに
ほだされれない、ほだすとは繋ぎとめる、束
縛すると辞書にありますから、それだけにが
んじがらめにならないと言ふ事、またそれに
は、幸福がおとずれても不幸が舞い降りても、
おとずれたまま、舞い降りつばなしとして、
現実を悠々と遊ばせる、そんな心が「いかな
るところにも著するなし」の心境なのだと思
ひます。